－ただキリストと共に歩む－

水 戸 無 教 会

第　６９　号

編集 半 田 梅 雄

※※

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな……半　田　梅　雄
変るもの変らぬもの…………………………桜　井　五　郎
横川集会に参加して…………………………石　崎　登美子
聖霊による勝利………………………………服　部　洋司良
信仰はその日の生命…………………………安　　　良　子
第１１回横川聖書集会の概要………………半　田　梅　雄
便　　り
後　　記

※※

聖なるかな　聖なるかな　聖なるかな

半　田　梅　雄

キリスト教の経典を「聖書」という。「聖」なる書は必ずしもキリスト教の専売ではないと思われるのに、「聖書」といえばキリスト教の独占語となっている。それはともかく、キリスト教に何の知識のないものでも、一度聖書を開いて見れば、「聖」なる文字が、無数にあることを知る。聖安息日、聖予言者、聖都、聖書、聖所、聖徒、聖霊等々。さらに聖書をよく読めば、単なる文字、誇張した形容詞として「聖」の字が用いられているのでなく、キリスト教の根本思想が、「聖」なる文字にこめられていることがわかる。

すなわち聖書全体を一言でいえば、「聖なるもの」であり給う神と、「聖ならざるもの」である人間との徹底的なる対比である

ことに気がつく。しかも、単なる対比に終ることなく、聖ならざる人間が、聖なる神によって、完全に潔くして頂けることを明らかにするのが、聖書の説く根本的原理であることがわかる。

古来、日本の思想には、類似の「清」はあるが、徹底した「聖」はないように思う。「みそぎはらい」をして清潔になることは日本人の願望であるが、聖ならざる罪のおのれを徹底的に否定し、聖なる唯一神に一さいをゆだねることによって、全く新しき生、すなわち永遠の生命に至る悔い改めはない。キリスト教では、これを回心という。本源的なものへの回帰は、一度大なる自己否定(即人間主義否定)によって、始めて可能なことを意味している。

ヨハネの黙示録四の八にいう。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者にして主なる神。昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者」と。

従来、讃美歌六六番によって、余りにも安易に、日常の挨拶のように慣れ親しんで来たこの「聖なるかな」の一語に、キリスト教の根本的原理がすえられていることに、いまさらのごとく眼を見はる思いである。

「聖」なる文字の中に、キリスト教の中心がある。「聖なる神」を知ることが、すべての始めであり終りである。ほかの何を知るよりもその一事を知ることですべてがこと足りるといってよいのである。

事業を成功させてくれる神、金をもうけさせてくれる神、試験に合格させてくれる神、病気を治してくれる神、交通事故から身の安全を守ってくれる神、よき子を授けてくれる神、戦争を勝たせてくれる神、世のすべての神は、このように我利に奉仕してくれる神である。この神の前に、人は大いに寄附銭を惜しまない。そのはずである。これらの神は、小なる投資で、大いなる利益をもたらしてくれるからである。

キリスト教の神は、これら我利に奉仕する神と根本的に違う。生まれながらに我欲の子である私達の眼のうろこを取り除き、実に聖なる霊（魂）の世界へ私達を教え導くところの神である。霊といい、魂といって、私達に霞を食って生きよという神ではない。わたしたちの物質的、精神的生活の一さいを、必要に応じて満たしつつ、聖なる神の国へわたしたちを引き上げ給うところの神である。

「神を知る」「聖なる神を知る」これより大なる事業はこの世にはない。わたしたちの生涯にとってこれより大なる事業はこの世にはない。これ以上の大発見もこの世にはない。

人なるイエスが、荒野の誘惑において、完ぺきに発見したのがこの神であった。彼の苦難と屈辱に満ちた公生涯の終り、ゲッセマネの園での祈り、さらにあの十字架上で発した「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」の従順にして壮烈な一語に、聖なる神のみ国が、永遠の光に輝くのを見る。

ああ、聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。聖なるみ霊によりて生かされる生涯のなんとよろこばしきことか。パウロもいう。だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か。いな、わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべてのことに勝ち得て余りがある。ーーーーーーと。

人の本性は、元来本質的に聖なるものを望む。ただ、人は余りにも弱い。眼前の利害からどうしても眼をそらすことができない。そのために聖書を手にしつつ「聖なる」文字の意味と絶大なる価値に気がつかない。「すべての人は迷い出て、ことごとく無益なものになっている」とパウロが指摘するとおりである。

聖書を開くことは、聖なる神のみ前にひざまずくことから始まる。「聖」を求めぬ人に聖書は意味なき古本に過ぎない。「神聖な物を犬にやるな」とイエスもいい給う。また「もとめれば与えられる」ともいい給う。然り、「聖なるもの」を求めよ、されば必ずすべてが与えられるであろう。そうでないものは必ずすべてを失うのである。

変るもの変らぬもの

桜井五郎

三年振りの集会参加でしたが、山奥の横川鉱泉にも世の移り変りの迫っているのを先ず実感しました。以前は道路も悪く、水戸からはバスで二時間余も見なければならなかった地域でした。それが今では、途中、常陸大田市あたりのバイパスが立派に出来ており、道路の舗装もほとんど完全になりました。

その上、今年は幸い鬼沢さんの車に便乗させていただいたので、僅か一時間ほどで着いてしまいました。旅館は利用者が年々増えているのでしょうか。この地域の三軒が何れも新築し、私達の定宿、中野屋も本館まで二階建となり、庭先は大半が駐車場に変っていました。宿のサービスの方も、今では若いお嫁さんの役割の様に見受けられました。

しかし、さすがに自然環境はそのままで、登み切った空、緑の山、涼しい風、そして夜の静けさなど、懐しい慰めでした。早天祈寿会の例の場所も変らぬ形で私達の為に用意されたかの様に、近くの滝の音も相変らず響いておりました。そうした中での二日間を、愛する兄弟姉妹と、聖書の勉強、祈禱会、感話会等々、信仰の交わりを深く出来たことは何よりの感謝でした。

「テサロニケ人への第一の手紙」の共同研究では、第二章を分担いたしましたが、勉強の準備と発表の前後を通じ、何よりも私自身、教先られること多くありました。珠に、バウロのテサロニケ人に対する熱愛の情、迫害と信仰のあり方などを学ぶにつけ、眠りかけていた信仰の霊の眼をさまされた思いで、正に「御霊を消してはいけない」（本書、五の一九）との御言葉の通りであります。

本書を貫く、バウロのキリスト再臨の信仰については、卒直に言って、その真理が良く判るまで、主の御導きを仰がなければならないと感じております。

夜の感話会では特に栗橋老兄が相変らず地方の因襲と斗いながら、十字架の御旗を高く掲げておられることを承わり、敬服させられました。

このごろ無教会にも一つ転機がおとずれたという様なことが聞かれますが、あるいは中心的な存在であった先生方が相次いで世を去られたことなどもその一例なのでしょうか。

それにしても、私達のような地方の小さな集会が、特定の先生に頼らず、二十年近くもとぼとぼと聖書の勉強を続け、又、毎年の夏期聖書集会を十一回も重ねて来たというのは不思議というほかはありません。思うに、テンボの早い世の移り変りの中で、こうした地味な独立の集会が保たれたのは、これは決して人の力ではなく、いつまでも変らぬ私達の救主イエス様の御導きの賜ものであり、ただ感謝に益れるのみであります。

横川の集会に参加して

石崎　登美子

七月下旬の或日、東京の宇野兄から「永遠の日本」誌と一諸に「暑さと共に又近づく横川と共に思い浮べていますーーー」というお便りを頂き、今年も是非参加させて頂きたく思っていたところでしたので、思いは同じ横川に連がり半田兄にお願い致しました。今年は猛暑の日がつゞき当日の八月十八日も非常に暑い日でしたが服部兄の車に同乗させて頂いたお蔭で無事参加することが出来ました。

今年の勉強簡所はテサロニケ第一章から第五章でした。二日に亘って五人の方々が講義して下さいました。どの章でもパウロのテサロニケ教会の信徒に対する盗れるばかりの熱い愛を知ることが出来ます。バウロのテサロニケ伝道は僅か三週間程度ですがテサロニケの信徒達はパウロ達の去った後、迫害の中で主にあって堅く立ち信仰を守り続けており、パウロとの間に深い愛の結び付のあることに心をひかれました。この固い結び付は迫害によるものであることを知ります。バウロの異邦人伝道はユダヤ人によっ

て非常な迫害を受け、その中でパウロは力と聖霊によって伝道しています。そしてテサロニケ教会の人々は迫害の中で聖霊と喜びをもって信仰を受入れています。この相互の迫害が愛の絆を強くしていることを学びます。何故迫害があるか、イエスは十字架につけられたそのイエスのあとにつゞくものが迫害を受けるのは当然なわけです。然しキリストの来臨を待ち望むその望み故にいかなる義性も忍耐するのがクリスチャンです。迫害に就いては当時の社会的背景が考えられますが、現代に於ても同じことがいえましょう。地域社会の小さい事柄の中でも正しく生きようとする時、迫害などといえないまでも似たようなことがあるのが分ります。「迫害を受けないものはクリスチャンでない。迫害を喜んで受けないものはクリスチャンでない。」といわれた内村先生の御言葉は痛くひゞきます。又、マタイ十章三十四～三十九を引用されて「自分が自分の敵となる」との半田兄の御感想は共感を覚え戒めになりました。「主の再臨はいつ来るか分らない、目をさまして慎んでいよう。」とパウロはいいます。心の中のサタンに勝たれてうかうかと眠っていてはいけないと改めて思いました。そそり立つ杉木立のはざ間、谷川のほとりの昇天祈麟会に出席出来たことも感謝でした。この横川の夏季集会の学びを通し唯一つしかない道をあゆみ続ける勇気を与えられて感謝は尽きません。

淋しく思いましたのは長年御出席の松本兄、石原兄お二人の先輩の方が御病気で御出席のないことでした。お二人の上に神様の特別の御恵みをお祈り致します。

聖霊による勝利

服部　洋司良

横川へ通る道路も舗装され、宿の主人も若いご夫妻になり、部室も改装され、この十一年間に横川も随分変りました。けれども、その中で変らず学んできたことは、主としてパウロの手紙であり、毎回感じさせられたことは、パウロの諸きようだいを思う愛の深さであります。

今回は特にテサロニケ前書から、パウロがテサロニケを離れて以後、テサロニケのきょうだい達が、激しい迫害に勝ち、立派に信仰を貫いたことを歓喜するパウロの愛と信仰とについて学びました。このパウロの喜びは、復活されたイエスの聖霊による勝利の喜びであると私は思います。

第一章に「わたしたちの福音があなたがたに伝えられたとき、それは言葉だけによらず、力と聖霊と強い確信とによったからである。」とありますが、この聖霊によって語ったことがテサロニ

ケのきょうだい達の勝利につながった訳であります。すなわちこの聖霊による勝利をパウロは歓喜しているのだと私は思います。

まだ、福音の述べ伝えられていない所に伝道することがパウロの方針でありましたが、テサロニケにおいてもパウロ一行がいくまでは、おそらく誰も福音を知る者は無かった訳であります。この中にきわめて少人数で、しかも迫害の激しいことを覚悟して福音を説くことは、自分の語ることが、聖霊に基づくものであることを堅く信じる以外にできないことであります。パウロは正にテサロニケにおいて、聖霊によって語ったことが確心された訳でありまして、このことが確心どおり、福音の勝利となったのであります。

パウロの諸きようだいを思う愛は、この「聖霊による勝利の確心」との関連において考えられます。

信仰はその日の生命

安　良　子

二年ぶりで、横川集会に出席させていたゞきました。舗装された道路は、歳月の変化を思わせましたが、昇天祈藤会の持たれるいつもの場所「滝」は少しも変らず、身についた世間の汚れ、垢をすっかり洗い落してくれるような　力強い流れと音でありました。

今年で十一回を数える夏の集会であることを新たな感動で思いました。このことは激動の世にあってはやはり感謝です。そして今回、導かれて参加できましたことを、恩恵であったと思います。人のさまざまな思いを越えたところで、大きなみ手の働いておられることを感じます。

テサロニケ書研究では、パウロがテサロニケの人々をどんなに愛し、又、祈る「祈りの人」であったかを学ばせていたゞき感謝でした。それから、参加された方々の感話を通して、「人みな弱く、小さきものである」ことをあらためて思わせていたゞき、これは私にとりまして大きな慰めとなりました。「ただ神のみ前に幼子のごとくひざまずく」ことが、実はやさしく、逆にむずかしいことも思いました。

「信仰はその日、その日の命である」と金沢常雄先生がいわれたという、そのことばが深く心に残った、夏の横川集会でありました。

集うべくして、病気や仕事などのために、集うことのできなかった兄弟・姉妹もお祈りで参加されたことを思います。

どうか、主につらなる兄弟・姉妹の上に平安がありますように。

感謝と祈りをこめて。

第十一回横川聖書集会の概要

半田梅雄

昭和三十八年第一回の横川集会が開催されてから今年で十一年目、毎年今年限りの臨時夏期集会のつもりが、いつの間にか十一回を数えるに至った。回を重ねる度に、参加メンバーも少しづつ変ったが、一泊二日の短期間にもかかわらず、いつも恩恵に溢れ、むしろ、この夏期集会を第一歩として翌年までの一年間の歩みを支えられて来た感じである。

この集会の特色は、牧師も先生もいないということである。平素の日曜集会と同じく、全員平信徒の集りであり、講師も仲間の兄弟姉妹の中から選ばれる。研究のテーマも聖書中心で、文学や政治論議が中心になったことは一度もない。ただ平素の日曜集会では個人個人の講師の連続研究発表が聖書の主題別に毎週一回宛数ヶ月に更って講議されるが、夏期集会では、数人のリレー又は集団研究の形で一度に比較的まとまった勉強が出来るので非常に有難い。

ガラテヤ書、ビリピ書、第二コリント書、ビレモン書、モーゼの十戒など実り多い勉強会がいまも記憶に新しい。

今年はテサロニケ人への第一の手紙を一章から五章までまとめて勉強することができた。

集会の日程順序は次のとおりである。

場所　茨城県久慈郡里美村横川鉱泉中野屋

日時　八月十八日、十九日

第一日

集合　十四時三十分

開会（十五時～十八時）　司会　半田梅雄

第一章講解　半田梅雄

第二章講解　桜井五郎

第三章講解　鬼沢力男

夕食

研究発表と感話（十九時三十分～二十一時）　司会　半田梅雄

第一章から三章までについて参加者全員の感想、研究して来たことについて発表が行なわれた。

第二日

早天祈禱会（六時～六時四十分）　司会　安良子

早天祈禱会は、旅館から歩いて十分程のところに滝があり、その後の林道沿いの小さな空地で行なった。

開会（八時～十一時三十分）　司会　宇野輝

第四章講解　　小貫武寿
第五章講解　　宇野輝
感話及び討議　　全員

参加人員は十七名、うち六名が女性であった。

教会には、職業的専門伝道者がいる。一般に組織的であるから、ある意味の業績評価も行なわれるであろう。これがこの世的伝道事業の基礎になっていることも否定できない面があろう。召命を受けた伝道者は、その所属のあるなしにかかわらず、ある力に押し出されて福音の宣伝に努力する。平凡な職業人である平信徒は、概ね前記の二者の何れかの指導を受けつつ信仰による生涯を歩むのが、一般の通例であろう。

ところが、内村鑑三先生によって唱道された無教会信仰は、このような組織集団によらず、職業的牧師の手引なしに福音自身が平信徒を導くことを証言する。たしかに無教会にも何らかの指導者はいる。殊に中央には優れた学者であり、信仰者であるいわゆる先生が相当数いる。こういう先生方と、地方に一人聖書を学ぶ信仰者の霊的つながりは、この世の教会への所属以上に強いものがあるかも知れない。しかし、それもない地方の信者は全く孤立して、聖書のみによるよりよき信仰生涯を送り得るだろうか。

エクレシヤを、キリストを頭とする霊的信者の集会と解すれば、いわゆる先生や牧師のいない集会があっておかしくないし、事実私たちは二十年間このような集りを続けて来た。

この集りに参加するものは、一度も出席を強制されたり、強い勧めを受けたことはない。

もともと、入会も退会もなく、全くの自由意思で出席するだけでよい。もちろん、洗礼も聖さんもない。義務があるとすれば一回の出席毎に支払う会場費五十円だけである。　このような集り故、集団的、組織的行動は確かに弱いかも知れない。しかし、完全な自由と個人の独立を犯すことなく、キリスト・イエスにある愛と謙遜の交りを通して、聖書の真理のみを探究し、おのおの異なる賜物を頂きこれを生かしながら深きところで一致する。

夏期集会という一つの組織的催しが、この一致を土台として開かれることはどんなに感謝しても感謝しきれないことのように思う。

横川夏期聖書集会が、不思議に支えられて十一回目を迎えたことは、やはり、人の意思や努力によるものでなく、上よりの恵みと導きによる。さらに、集会の持ち方が、上よりの力のみによりすがるものである限り、主は必ずこれからも続けさせて下さるであろう。

感謝と共に深き導きを祈る。

力と勇気の手紙

栗　橋　　清

天高く馬肥える秋には未だですが、季節の移り変りは野山のススキの穂末にも感じられて来ました。そろそろ農家も忙しさが増して来ました。早生の稲刈も終り、中生、晩生の稲刈りとしばらくは続くことになります。

先日は横川集会の写真を送っていただいて有難うございました。横川の思出が新に感じられました。

横川集会は、回を重ねても尽きることのない福音の道は奥深く信仰へ導かれることは、感謝であります。偉大なる伝道者パウロでさえ、いろいろの迫害と困難と苦難に遇われたテサロニケの書簡は、我々に力と勇気を与えて下さることを感じました。

主なる神さまの御導きを願ってやみません。横川での御教導に深謝します。

ほんとうの勉強

河　井　　玲　　子

自然の中にも、街の中にも秋の色が感じられる今日このごろです。

横川集会に参加した時には、いろいろありがとうございました。サヽヒさんより写真を受け取りました。五時起きが身にしみたのか、すごく眠そうな顔　をしているのには自分ながらおどろきました。でもほんとうに勉強になったと心から喜んでおります。それから、感想文のことですけれど、学校でのテストが昨日終ったばかりで・・・ほんとうに申しわけないのですけれど、締切までには間にあいそうもありませんので、又機会がありましたら参加させていただきます。

一雨毎に涼しくなってまいりますので、御健康にはくれぐれも御注意下さい。では又お便りいたします。

勇士は神のみもとに

井　坂　　き　　の

秋が深まって参りました。御便りと御写真ありがとうございました。感謝でございます。

塚本先生が召されて、さびしい秋となりました。勇士は神のみもとに召されていった。勇ましい戦いの数々を地上にのこして・・・。呼吸困難の者には、「神の息にて生きよ」と、また手術を受けているものには、「祈りに明け、祈りにくれるのがわたしたちです。祈っています。私のためにも祈って下さい。」などとお忙しいなかを弱い者に心をかけて下さいました。勇ましい勇士であり、やさしい愛の人でありました。

さびしさを深めますのは、塚本先生の告別式に参列した無教会のメンバーに、若い層が少なかったことでした。これはほんとうに限りないさびしさを感じさせました。

ハ兄の日曜学校は、大変大事な御仕事だとしみじみ思いました。種をまくのは人でも、実を結ばせて下さるのは神の御仕事でございましょう。一人でも信仰の芽が伸びますようにと祈ります。

原稿久しぶりにと始め張り切ったのですけれど、ペン取る時間がやっぱり生み出せないので見送ります。みな様のを読ませて頂きます。感謝しつつ。

全き自由の人

佐川浩子

横川集会より一ヶ月になりますが、そちらの皆さまにはお変りもないことと思います。

塚本先生の昇天、先日藤林さまより知らされ驚いてしまい（あまり突然でしたので）ぼうとして、その日は何も手につきませんでした。先生には、水戸駅（先生は電車の中）でお目にかかっただけでしたが、あの時の印象は忘れられません。直接お教えは受けませんでしたが、先生の御本を通して学んだことは言葉では表わすことのできないほどでございます。塚本先生のお名前を始めて聞いたのは、友部のア・ケの集会でした。　ハさまが「塚本訳」といわれたのが最初でした。先生には、もっと長く・・・と思っておりましたが、今は不思議とすべてのお苦しみよりとき放されて、全き自由の先生を思いますとき、心安まる思いです。

福音の旗高く

宇野輝

お手紙を言い難い親しい感銘をもって拝読致しました。内村先生が凱旋されてその追悼の戦に立たれた矢内原先生の「我等は七人」（ワーズワスの詩句）その七人の先生が塚本先生を最後にみんな神様のもとに還られました。水無誌が困難な戦の中に再び福音の旗を水戸の地にひるがえされること、そのことが、現下の日本の福音に立つ各地の兄弟の遠望する支えと励ましになりますことを信じます。先生方もよろこばれて見守り、天から応援して下さることと存じます。水無グループの特質である責任と自覚により前進されんこと祈ります。

『後　記』長いご無沙汰をお許し下さい。本誌も諸兄姉の祈りと励ましに支えられて、再び小さき歩みを始めることになりました。本号は、横川集会の報告をお届けします。研究の内容を発表する機会が恵まれるよう祈っています。塚本虎二先生の昇天に、深く頭をたれています。何もしていない自分を恥ずるばかりです。内外に危機が迫っています。物の危機でなく心の危機であることが一番問題です。いまこそ「パンがなくとも人は生きられる」ことを深く知るべきでしょう。キリストは来りたまいました。祈ります。

（半田）

水戸無教会　第六十九号
昭和四十四年十二月発行

水戸市緑町三―九―二六
水戸幼稚園内

発行人　松本文助
編集人　半田梅雄

（実費五十円　〒二十円）